

石木哲夫先生を偲んで



石木哲夫元歯学部長、 逝く

明倫短期大学教授 福島 祥 紘
(元本学口腔病理学教室助教授)

昭和48年から60年の間、3期計6年間にわたって本学歯学部長をつとめられた初代口腔病理学教室教授の石木哲夫先生が、平成12年3月12日午後4時55分膵臓癌で逝去されました。3月14日午後7時より通夜が、3月15日午前11時より告別式が、新潟市青山会堂にて行われ、多くの本学部教職員および卒業生が参加し、冥福の祈りを捧げました。

石木先生は、平成2年定年退官以降、日本歯科大学新潟歯学部教授、福岡歯科大学学長を歴任の後、新潟市にある明倫短期大学の副学長の要職にあり、歯科医療に携わる人々の養成に励んでおられました。

尚、明倫短期大学葬は4月20日に大学内でおこなわれます。

通夜式にて述べた「お別れの詞」を掲載することで、その詳細に代えさせていただきます。

先生、先日前お見舞いに伺った際の先生の穏やかな笑顔と奥様とのこやかな会話からは、今日こうして、お別れしなくてはならないことが、どうしても信じることができません。先生とのお別れを清めるかのように、今朝は早朝より雪が降りしきっております。

思えば、先生との出会いは、昭和44年、創設もない新潟大学歯学部へ私をスタッフとしてむかえて下さった時ですから、もう30年余となります。今はこうして、新しい歯科医療系大学の創設に共

に働いているというのは、何という縁（えにし）なのでしょうか。

先生は新潟大学歯学部口腔病理学教室の初代教授として、あるいは三期にわたる歯学部長として、日本海沿岸唯一の国立大学歯学部を立派に育てることに大きな貢献されたことはもちろん、福岡歯科大学では、学長として私立歯科大学の発展に寄与されたことは、周知のことです。学会活動としても、日本病理学会、歯科基礎医学会、日本口腔インプラント学会、日本歯科医学教育学会等々において、理事、副理事長あるいは会長としてご活躍されてこられました。なかでも特筆すべきは、現在の日本口腔病理学会を創設されたことでありましょう。歯科基礎医学の中での口腔病理学の位置づけとその将来の道を模索されたことが、現在の発展に繋がったことを考えると、その先見の眼差しは、評価してもしきれぬものではありません。

先生は、また、学間の国際化にも大いに関心をもっておられました。そのはじめは私の赴任3ヶ月後の文部省在外研究員としてのアメリカミネソタ大学への研究留学でありましたが、その際知りあったゴウリン教授、シャピロ教授、チェルベンカ教授との交流は、生涯にわたるものとなりました。ことにチェルベンカ教授はご家族づれの来日を含め計4回来新され、新潟大学に細胞遺伝学の手法を導入し、有意義なものがありました。

先生の心を尽くした接待は、先生の温厚なご性格とともに、チェルベンカ教授ご夫妻の心にも伝わり、その友情は我々からみても素晴らしいものがあったと思います。

中でも忘れられないのは、先生と国際口腔病理学会とのかかわりであります。第1回は、スウェーデンのイエーテボリで開かれました。しかし、実は事前に学会理事会より日本開催の可能性を打診されていたのですが、当時の日本の口腔病理学は、学問的にも伝統的な歯牙病理学から全身一般病理学まで多岐にわたり、統一に欠け、とても日本開催をひきうける状況ではなかったのであります。イエーテボリの美しい海を見ながら先生と今は亡き小守徳島大学教授と3人で、いつの日か必ず日本で開催を誓ったことを覚えておられますか。

実現にむかったのは、第3回（4年後）の英国での学会時で、次次回つまり第5回、更に4年後に日本で開催することが予約されたのでした。それからが大変でした。日本中の口腔病理学担当教授を集めて組織委員会をつくり、開催に備えたのであります。今では普通になりつつありますが、当時の歯学部の1基礎研究室が国際学会を開催することは、極めて稀なことでしたが、必ずや日本の口腔病理学の発展の礎になるにちがいないというのが、先生の想いの根にあったことでした。

ところが、第4回の国際学会がフィラデルフィアで開かれた時には、日本よりその実行プランを携えて行ったのですが、学会の様子が微妙に変わっていたのであります。国際学会をヨーロッパからださずにドイツで開こうという申し合わせが、欧州出身の理事の間にできていたのでした。がく然とした後に怒りの感情が押し寄せて参りました。2年間の準備は何だったのか、他の組織委員会のメンバーに何と申し開きをしてよいのか。当時我々は十分なお金を持っていませんでしたから、実は先生と二人、大きな学会用ホテルのなかでTwinの部屋に泊まっておりました。そして徹夜で翌日の理事会での説明原稿の準備をしたのでした。

私が怒りを胸におさめて30分の演説をし、先生は穏やかな姿で適切なアドバイスと説明を加えた

結果…あの見事な逆転劇となったのであります。ドイツのハンブルグ大学の教授から〈君たちはどんなマジックを使ったのか？〉という嫌みをいただきましたが、祝福の言葉にしかきこえませんでしたね。その夜、学会のイベントの一つであるフィラデルフィア交響楽団の演奏程、快い気持ちできいた音楽はなかったでしたねえ、先生。しかもそのときの音楽というのが、マーラーの交響曲第2番の〈復活〉であったことが忘れられず、何度、先生と喜びあったことでしょうか。

そして2年後の1990年。東京で第5回国際口腔病理学会が開かれたました。先生は学会長としてアジア各地から口腔病理医をあつめ、そのシンポジウムを開催し、アジアの口腔病理の国際化にも貢献することになったのです。この学会は第1回の日本口腔病理学会を兼ねていましたから、それから丁度10年、今や英文雑誌も発行する立派な国内学会へと成長したことは、どなたもご存知のことでありましょう。

先生。先生の穏やかで優しい態度は、学生からも慕われていたものですが、2つの歯科系大学の創設に立ち会い、1つの私立歯科大学のトップマネジメントをしてこられたということは、優しさの中にも強い意志と遠くを見すえた決断力があつたことを物語っていると想うのであります。

本、明倫短期大学は、現在4年制大学への道を苦しみながら歩んでおります。先生は副学長として関わったその苦しみの果実を味わうことなく、逝かれました。しかし、私共は先生がいつも横において我々を励ましつづけて下さることと信じております。

最後に、先生は家庭人としても大変優しい方でありました。明るく久美子夫人と共に、今は医師として活躍されているご長男と美しいご令嬢を立派に育て上げ、素晴らしいご家庭を営まれていたことは、私たちにとっても、またとない手本でありました。

先生と同じ時代に生き、苦しみ、喜び、人生の或る部分を共感しながら生活できたことは、或る意味で本当に心楽しいことでありました。ありがとうございました。ここに謹んでお別れのご挨拶といたします。

追 悼

歯学部長 花 田 晃 治

石木哲夫名誉教授におかれましては、病氣療養中のところ、平成12年3月12日、午後4時57分、膵臓癌のために新潟大学医学部附属病院においてご逝去されました。享年75歳。謹んでご冥福をお祈り申しあげます。

新潟市青山会堂で営まれた、14日のお通夜、15日の告別式には本学関係者をはじめ、全国各地、各界からの多数の参列者が集われ、故人のご冥福をお祈り申しあげました。

石木哲夫先生は、大正14年1月16日に東京でお生まれになりました。昭和22年3月に東京医学歯学専門学校歯学科を卒業されました。昭和26年11月～32年10月、東京医科歯科大学歯学部病理学教室助手、昭和32年10月～41年12月、東京青梅市民病院技術吏員を勤められました。

昭和42年5月、創設間もない新潟大学歯学部教授として赴任され、口腔病理学教室を主宰されました。昭和30年代までは、日本海側には国立大学歯学部はありませんでした。というよりは東京医科歯科大学歯学部と大阪大学歯学部だけでした。そこで新潟大学医学部教授会では、日本海側の歯科医学・医療の中心となるような歯学部の設置を決め、歯学部設置促進委員会および歯学部設置期成同盟会の熱心な活動により、昭和40年4月1日、新潟大学歯学部が設置されました。昭和42年6月12日に第一回歯学部教授会が開催されていますので、石木教授は赴任と同時に歯学部創設期の激務に身を置かれました。そして7月には歯学部からは初代の新潟大学評議員に就任されました。さらには創設期に必要なすべての仕事、すなわち歯学部規程の制定、新しい講座の開設、教授会の発足、カリキュラム編成、専門課程教育の開始、医学部病棟・診療等借用およびプレハブ棟新築による研究室の整備、医学部講堂・実習室借用による研究

室の整備など、非常に多岐多様な管理運営に勢力を傾けられました。

昭和44年11月～45年11月には、文部省在外研究員としてアメリカ、ミネソタ大学へ留学されました。この時の研究交流・業績を基とした石木先生の献身的なご努力によって新潟大学としては最初の姉妹校としてミネソタ大学との学術交流締結が達成されました。この間にあって、昭和48年7月から2期4年および昭和58年6月から1期2年、歯学部長を勤められ、10歳代から20歳代までの若き歯学部のなかにあつて成熟、発展に向けて献身的な努力を続けられました。また、昭和60年7月から63年11月まで、新潟大学附属図書館旭町分館長を務められ、学術研究の発展に寄与されました。学外にあっては、昭和53年から58年まで、大学設置審議会専門委員(大学設置分科会)、昭和59年から62年まで学術審議会専門委員(科学研究費分科会)、平成元年から3年まで医療関係者審議会専門委員(歯科部会員)、平成元年から2年まで学術審議会専門委員(学術用語分科会)などを勤められ、歯科医学教育および研究の発展、充実に貢献されました。

平成2年3月31日、定年退官時には、長年にわたる新潟大学における教育研究および管理運営への貢献に対して名誉教授の称号が授与されました。平成2年から3年まで日本歯科大学新潟歯学部教授、平成3年から福岡歯科大学学長、平成9年から明倫短期大学副学長をそれぞれ務められ、歯科医師および歯科医療従事者の養成にご尽力されました。

石木哲夫先生は、現在まで日本歯科医学教育学会の会長を務めておられたことからわかりますように、歯学部学生の教育について情熱を持ち続けてこられました。日本歯科医学教育学会におい

ては、数々の歯科医学教育に関するシンポジウムなどを主宰されるとともに、教育者の教育開発について先頭に立って進んでこられました。こうしたご功績が広く認められて平成7年には、日本歯科医学会会長賞を受賞しておられます。教育者としては、きびしさは内に秘めて、全ての学生に優しく暖かく接してこられました。先生のお人柄に救われた学生はかなりの数にのぼることでしょう。石木先生から人間性の広さの必要性について薫陶を受けた卒業生は研究者、教育者、臨床医、行政者をはじめ、全国において多くの分野で活躍しています。石木先生の後をしたって教育者とし

ての道に進んだ卒業生が数多くいます。新潟大学歯学部においても多くの卒業生が教授をはじめとする優秀な教官として活躍しています。

石木先生が新潟大学歯学部口腔病理学教室の初代教授として、さらには創設期の新潟大学歯学部の歯学部長として、この地に蒔かれた種子は着実に芽をふき成長を遂げ、21世紀を迎えるにふさわしい大樹になろうとしています。どうぞ新潟大学歯学部の発展をお見守りください。

石木哲夫先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

石木哲夫先生のご逝去を悼む

口腔病理学講座 朔 敬

石木哲夫名誉教授はご病氣療養中のところ、平成12年3月12日ご逝去になりました。享年75歳。同月15日青山会堂で営まれたご葬儀には、本学関係者はもとより全国各界より多数のかたがたが参列されて故人のご冥福をお祈りになりました。ここに謹んで哀悼の意を捧げますとともに、先生のご威徳をしのびたいと存じます。

石木哲夫先生は、大正14年1月16日東京都にお生まれになり、昭和22年3月東京医学歯学専門学校歯学科をご卒業後、同年4月より同校病理学教室において病理学の臨床と研究の道に入られました。以後、東京医科歯科大学歯学部病理学教室助手に任官され、同32年より東京都青梅市立総合病院歯科長と同検査科長を兼務されたのち、40年12月東京医科歯科大学歯学部助教授に昇任、新潟大学歯学部新設に伴い、同42年5月同大学教授に就任され、停年により平成2年3月新潟大学を退官されました。

この間、昭和48年7月、新潟大学歯学部長に選出されて2期4年、さらに同58年6月より1期2年、計3期6年にわたり歯学部長を併任されました。また評議員を同42年より62年まで、計3期6年間併任、附属図書館旭町分館長を同60年より63年まで併任されるなど、新潟大学在職23年8ヶ月のうち、約15年間新潟本学の中核にあって、本学の管理・運営に尽くされたことより、平成2年5月新潟大学名誉教授の称号をお受けになりました。また、学外では、昭和53年6月より同59年3月まで約6年間、大学設置審議会専門委員（大学設置分科会）に任命され、長崎大学等の国立大学歯学部設置に、徳島大学大学院歯学研究科等の設置の審議に努力されましたし、昭和59年より平成2年まで学術審議会専門委員に任命され、文部行政にも大きな貢献をされております。さらに、昭和44年より同46年まで、厚生省歯科医師試験審議

会委員、平成元年より同3年まで、同省医療関係者審議会専門委員をそれぞれ委嘱され、厚生行政への寄与も大きいものでありました。

本学退官後は、平成2年より日本歯科大学新潟歯学部教授に就任され、同3年には福岡歯科大学学長に就任、同6年からは学校法人福岡歯科学園常務理事として同歯科大学の管理・運営に努力されるとともに、社団法人日本私立歯科大学協会理事としても日本の私立歯科大学における教育・研究の質的向上に尽力されました。同8年同法人を退職されたのち、新潟市に新設された学校法人歯友会明倫短期大学副学長に就任され、同大学の教育と運営に大きな足跡を残されました。

研究面では、東京医科歯科大学において、口腔病理学教育を通じて生命科学の基礎を身につけた教育者、研究者の養成に尽力されるかたわら、口腔病理学の研究に励まれました。青梅市立総合病院において歯科医療とともに一般病理診断業務を実践され、そのご経験はその後の歯学教育に活かされました。当初は、病理解剖学・口腔病理学の方法論に加え、主として口腔顎顔面発育障害に関わる実験的研究を行われて、昭和33年6月には「実験的弗素中毒症における歯牙殊にエナメル質形成障害の発生機序並びに唾液腺の変化について」の研究により、東京医科歯科大学から医学博士の学位を授与されておられます。

新潟大学教授に赴任されてからは、歯および顎骨の形成障害に関する臨床病理学的ならびに実験病理学的研究、最新の電子顕微鏡を導入した唾液腺腫瘍ならびに歯原性腫瘍さらに口腔粘膜疾患の病理組織細胞学的研究を実践され、これらの疾患の病理発生機序を明らかにされました。また、顎骨嚢胞についても病理組織発生の理論的解析から新しい分類基準を提案され、歯科医療において嚢胞性疾患への対応を容易にされましたことは現在

も臨床医のあいだで高い評価を得られています。ミネソタ大学との共同研究を契機に、遺伝性エナメル質形成不全症の解析を開始され、エナメル質形成担当遺伝子研究の端緒を開かれたことは、今日の遺伝子工学の隆盛をすでに30年以前より予測された鋭い研究者としての見識がうかがえ、わが国の口腔病理学の世界に誇る業績と思われまゝ。さらに、口腔インプラント学の基礎的裏付けに関して病理組織学的立場から多大な業績を残されました。すなわち、当初臨床的側面だけが先行していたこの新しい歯科領域は、石木先生によって科学的根拠があたえられたといっても過言ではありません。バイオマテリアルに対する生体の異物反応様式の評価、さらにインプラント植立後の骨ならびに粘膜の陥合接着様式を病理組織学的立場から解明されたことがインプラント歯科医療を今日のようにひろく普及させる大きな推進力となったのです。新潟大学歯学部長、同大学評議員等の要職で多忙ななかにながらこのような世界的業績をあげられたことは、先生の研究者としての資質もさることながら、同僚後輩から協力を惜まざり慕われた豊かで高潔な人格も大きな役割をはたしたことは衆目の一致するところである。これらの研究展開をとおして、歯学教育者ならびに研究者あるいは行政官を多数輩出され、新潟大学歯学部口腔病理学講座在籍者で、教授・助教授等の指導的立場で活躍しているものは雨宮瑋北海道大学名誉教授はじめ十名を超えます。

歯学部教育の面では、病理学および口腔病理学の教育をとおして歯科基礎医学ならびに臨床病理学的見識をともなった臨床歯科医学を身につけた歯科医師を社会に送り出すことを目標に掲げられ、新潟大学在職中に執筆出版された口腔病理学教科書は、図説口腔病理学（昭和45年、医歯薬出版）、病理学各論（昭和52年、昭和59年、南山堂）、口腔病理学・（昭和57年、永末書店）、口腔病理カラーアトラス（昭和58年、医歯薬出版）、カラーアトラス基礎組織病理学（昭和62年、西村書店）、図解病理学・口腔病理学実習書（平成4年、医歯薬出版）等があります。いずれも日本語で書かれた病理学・口腔病理学教科書としては、絶大なる信頼を集めたもので、日本の口腔病理学教育を世界

水準に伍して、さらにそれを超えるレベルに高めた功績は大きなものがありました。石木先生のご懇切な学生指導は定評があり、その温厚なお人柄は学生の絶大な信頼を集めたものです。

昭和42年に新潟大学歯学部附属病院が開設されたのに伴い、口腔病理学講座として病理検査を受託し、在任中に担当された外科病理検査件数は合計8800件を超えました。さらに、歯学部には病理解剖室を整備して剖検を開始され、40件以上の診断をおこなわれました。これらの病理業務の実践は、石木先生が昭和29年に東京医科歯科大学在職中に厚生大臣より死体解剖資格認定を受けられて以来培ってこられた疾患の全身的理解に立った歯科医療の実践にほかなりません。平成元年に日本病理学会に認定口腔病理医制度が導入されることに尽力され、その制度が発足するとみずからその認定医資格を取得し、歯科領域に臨床病理学が根付くために国内外で奔走されました。さらに国際口腔病理学会の招致を機に、平成2年日本口腔病理学会の設立を国内の口腔病理学関係者に呼びかけて実現し、大会長として第1回学術大会を併催し、臨床病理学を基盤とする今日の日本口腔病理学会の基礎をつくられました。

国際交流に関しては、昭和44年12月より1年間文部省在外研究員としてアメリカ合衆国ミネソタ大学にて口腔の先天異常疾患の症候学的ならびに遺伝学的研究をおこなわれるとともに、ヨーロッパ各国に出張して世界の歯学教育研究状況を視察されています。また、同56年2月より同57年4月にかけて、フルブライト交換研究者としてアメリカ合衆国ミネソタ大学客員教授をつとめられ、ゴーン教授ならびにチェルベンカ教授とともに、歯科領域の先天異常疾患の細胞遺伝学的研究を開始され、これを契機に新潟大学とミネソタ大学の姉妹校協定の締結にご尽力され、研究員の交換交流を推進されましたことは本学の国際交流の歴史的事業です。昭和56年スウェーデンのヨーテボリでひらかれた第一回国際口腔病理学会にアジア代表理事として参加されて以来、同学会の運営に参画、平成2年6月にはアジアではじめて同学会第5回学術大会を大会長として東京に招致されました。同時に国際的専門学術雑誌 Journal of Oral

Pathology & Medicine の編集委員も長年にわたってつとめられました。

学会活動に関しては、以上のとおり歯学の基礎ならびに臨床にひろがる教育研究を展開されましたが、歯科基礎医学分野で最大の学会である歯科基礎医学会に設立当初より参画され、昭和55年から2期4年間を常任理事として、昭和63年から平成5年までの2期6年間を副理事長としての要職を歴任されるとともに、昭和50年には会頭として第17回同学会学術大会を新潟市で開催されるなど、同学会の発展に努められました。また、臨床分野では、昭和43年以来今日まで日本歯周病学会理事、昭和63年より平成4年まで、日本病理学会認定口腔病理医資格審査委員会委員長をつとめられ、口腔病理医制度を確立させ、口腔病理診断業務の臨床的認知を推進されたことは、わが国における歯科医療の歴史に特筆される業績となりました。同時に日本口腔外科学会ならびに日本口腔科学会においても口腔外科診療における病理診断学的側面を支援され、昭和57年には会長として同学会北日本地方会を新潟市において開催されています。一方、歯科医療にインプラント法が導入され

ると同時に人工歯根顎骨植立に関する基礎的側面の研究を一手に引き受け、昭和56年より同60年まで日本歯科インプラント学会理事に就任されるとともに同56年には大会長として同学会総会を開催され、昭和60年に第3回世界バイオマテリアル学会プログラム委員、昭和62年から平成2年までは日本口腔インプラント学会副会長をおつとめになり、わが国におけるインプラント歯科医療の確立に大きな貢献をされました。石木先生は、歯学研究のみならず、歯学教育にも高い見識をお持ちでしたが、日本歯科医学教育学会の設立に参画以来、昭和62年以来同学会理事、平成4年からは同学会会長を歴任され、わが国の歯学教育の向上に情熱を注がれました。

以上、石木先生のご業績、ご功績の一端を記しましたが、先生は後進のわたしたちに尊い鑑を止められたと受けとめております。石木先生の偉大なご生涯をたたえ、御霊のご冥福をこころよりお祈り申し上げます。なお、石木先生には、上記の卓越したご業績によって、勲三等旭日中綬章、正四位が授与されたことを申し添えます。

合掌。